

# 山と博物館

第20巻

第10号

1975年10月25日 大町山岳博物館

## 木食作の

### 観音立像について

この聖観音立像は大町市南原町の長性院（通称六角堂）の本尊である。古くから須弥壇厨子の奥深く安置され、七年に一回の御開帳の際でも、暗い扉の中に僅か拝するだけでまったく公開されない秘仏であった。それが昭和四十八年十二月末、納骨堂と位牌堂増設のとき始めて外部に出され、木食山居の作であることがわかったのである。

寄木造りのこの像は高さ一〇三〇〇、下の蓮台から光背上端まで一八〇〇、容姿端正で調和のとれ、全身の金箔も永年月のさびで美しい美しさを保っている。問題の墨書は像の背面光背のつけ根部分に、「万駄の内 木食山居作」と楷書体で書かれている。まぎれもない山居特有の書体である。

木食山居故真は明暦三年（一六三七）頃松本に生まれ、上水内の虫蔵山で木食行を積み、椿峯の高山寺五世の住職となり三重塔を修葺、後に大町彈誓寺の六世を継ぎ若一王子神社の観音堂や三重塔を造営した。その間に一万体の仏像彫刻の悲願を果している。享保九年（一七二四）九月七日、死期を悟り自ら食を断つて入定した。墓は彈誓寺にある。

円空の五行と並び称される木食仏の中で、山居仏といわれる彼の仏像は、高山寺の一千体をはじめ各地に残されている。山居仏には芯持ちの雑木を荒削りにしたもの、簡素で直裁の手なれたもの、体軀の抑揚や端正な表情のよくでた本格的なものなどいくつかの類型があり、素朴な彫りだけのもの、うるしを塗り金箔を押した精巧で専門的なものなどがある。また像形は立像が主で、十五厘から二十厘前後のものが大部分である。等身大に近い金箔押しの大作としては、最近確認された高山寺の阿弥陀座像ほか二体、池田町浄念寺本尊如意輪観音座像くらいのものである。従って新発見のこの像は、山居仏中最大で最も精巧な、木食上人晩年の秀作と推定され、木食仏研究上重要な意義をもつ貴重な資料でもある。

（大町史談会長

上條 為人）



木食山居作の聖観世音菩薩（大町市南原町曹洞宗南原山長性院）

撮影 山本 携挙

# 樹木と害虫(1)

## 最近発生のみられる森林害虫

小沢 孝弘

ここ二三年、長野県下の各地でアカマツ・カラマツの針葉樹やナラ・ハンノキなどの広葉樹が、急激に葉を失って枯れたような状況となり、遠望するとき赤褐色に変じた山々がよくみられる。

これは大発生した色々の害虫類が、葉を食害した結果によるもので、枯れるような恐ろしい被害の時もあるので、昨今山の所有者はもとより関係機関の人々も自然保護上、あるいは観光上憂慮している現状にある。

このような異常ともいえる山林の被害は、昭和四十七年度より急に現われたものであるが、この主因はこの年の暖冬異変、つまり異常気象がもたらした現象と思われる。なおこの影響は山林のみならず庭木などにも各種の害虫を誘発した。

今回、編集者より森林の害虫についての執筆依頼があったので、主ながら諸害虫の発生環境、生態、防除法などを述べてみたいと思う。

### 異常発生した害虫類

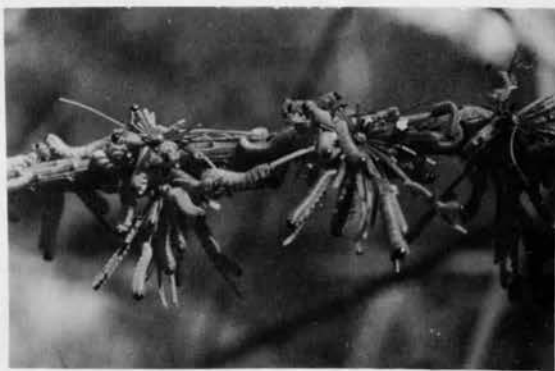


一、マツノクロホシハバチ  
長野県下で現在最も被害の著しいのが、マツノクロホシハバチという膜翅目に属するハチの仲間である。この害虫の被害は主にカラマツ林に大発生しており、木曾谷、伊那谷、南安曇地方などでカラマツ林が全山赤褐色となった惨状を多くの方々がみておられると思う。

一般的にハバチ類は突如大発生し、しばしば大被害をもたらすが、その多くは二・三年で姿を消してしまうといった特徴がある。

長野県におけるマツノクロホシハバチの発生をみると、大正二年に木曾谷に、昭和三年に浅間山麓に、昭和二十六年に同じく浅間山麓に大発生があり、昭和四十七年に木曾谷、伊那谷地の発生となったようにその発生間隔は比較的長い。そのかわりひとたび発生すると、繁殖力の旺盛なためはげしい勢いで被害が拡がり激害をもたらすことになる。

この害虫は一年に二回発生する。カラマツの針葉を食害する時期は第一回目が繭内幼虫で越冬したものが、春五月羽化、交尾後産卵、ふ化した幼虫によって六・七月にみられる。第二回目は八月下旬・十月上旬にみられるが、幼虫はあざやかな黄色で、体長は老熟幼虫で約二〇ミリに達するが、ふ化したときから老熟して蛹化するときにまで群棲する性質があり、常に何十頭あるいは二・三百頭が集団でカラマツの針葉を食害している。そして人が近づいたり、物におどろくと一斉に頭をふりうごかす特性がある。



群棲してカラマツ針葉を食害中のマツノクロホシハバチの幼虫

る。

現在長野県における被害は、約三千ヘクタールに達し各地でカラマツが大分枯れはじめ深刻な問題となりつつあり、私共もその防除対策に日夜あけくめしている。

防除はこの虫が薬剤に対して非常に弱いので、現在使用し得る、低毒性有機リン剤、カーバメイト系薬剤などどんな薬剤でも散布すれば効果はあるのだが、被害面積が拡がりすぎて広大な面積のためヘリコプターによる空中散布以外は一斉駆除がむずかしく、思うような効果をあげることができず苦慮している次第である。

いずれにしても、マツノクロホシハバチの被害はまだ拡がる可能性があり、信州を代表するカラマツ林がやがて緑を失う危険性もあるので、関係者の真摯な防除対策を期待している。

### 二、カラマツアカハバチ

同じハバチ科の仲間で、カラマツアカハバチも昭和四十七年に長野県下で大発生したが、本年はや、下火となり発生は少なくなってきた。

この害虫も県下で昭和三十一年に上田地方に大発生以来、約二十年ぶりの大発生で、主に東北信に発生しているが、昭和四十九年度の被害面積は約六千ヘクタールに達した。マツノクロホシハバチに比べて、この害虫は枯損につながる程の激害はみられなかったものの、やはり各地でカラマツ林が全山赤褐色となる被害がみられた。

カラマツアカハバチは年に三回発生する。幼虫の食害期は六月、七・八月、九・十月と三回にわたってみられるが、その多くは同じ林分で発生が繰返されるため、被害を受けたカラマツ林は梢頭部がすけてみえるようになり、全山から緑葉が全くみられない状況となる。

幼虫は黒色で、背面は黒い斑紋状をなし、老熟すると体長約一八ミリに達するが、この害虫もまたマツノクロホシハバチと同じように群棲し集団で加害する性質をもつ。

長野県における発生分布(図参照)をみると、カラマツアカハバチが長野県の東側、マツノクロホシハバチは西側といったように棲み分けがみられたが、カラマツアカハバチの発生がなくなってきた現在は、マツノクロホシハバチが、東側へ漸次拡がっていく傾向がみられる。

この両種のハバチの防除については、これまでスミチオン、DDVPを混合した燻煙剤を主に使用して効果をあげてきたが、前述の低毒性有機リン剤のスミチオン、ダイアジノン、ディブテックスなどの粉、乳剤の散布も効果があった。

### 三、オオトビモンシヤチホコ

昭和四十九年に伊那市郊外のクヌギ林にオオトビモンシヤチホコが大発生した。



クヌギを食害するオオトビモンシヤチホコの幼虫

この害虫は古くからクヌギ、コナラ等ブナ科植物の害虫として著名ではあるが、これによる被害は単木的で、県下でもときどき単木的な発生はみられた。それが今回、林分単位の上新興団地の周辺に残した林分に発生し、住宅にも侵入するといったケースもあつて問題となった害虫である。

オオトビモンシヤチホコは比較的大型の害虫で年一回の発生、幼虫の食害期は五〜六月で幼虫は体長約五〇ミリにも達し、頭部黒色、胴部は赤と黒のまだらで気味の悪さを感じる害虫である。

この害虫もまた群棲する性質があり、今回発生の際には餌不足のため下降した幼虫が樹幹を埋めつくすという異常な様相がみられた。

なおこの時の幼虫は、餌を求めて隣接した住宅地に侵入して大騒ぎとなつたので、伊那市当局ではスミチオン乳剤を散布して一応の終末を得たが、このように森林の害虫も住宅地に接した場所に異常発生すると、森林害虫

が衛生害虫に変わって、丁度アメリカシロヒトリの如く大騒動となり住民から忌み嫌われる。なお最近、同じように住宅に侵入し問題をおこしている害虫にオビバヤステという害虫がある。この虫(実際には節足動物)については新聞紙上でとりあげられて報道されたから御存知の方もあること、思うが、防除は薬剤の効果はほとんどなく、熱湯をかけるかバケツの水に入れるといった方法で駆除できる。

#### 四、アカアシノミゾウムシ

昭和四十七年頃から長野県下の各地で、春から夏にかけてケヤキの木が、葉を食害されて丸坊主になる被害が目立ちはじめた。これはアカアシノミゾウムシという小型のゾウムシによる加害である。この害虫は、五〜七月にかけて成虫がケヤキの葉を葉脈を残して網目状に食害するため、遠望すると茶褐色となり紅葉したかのようにみえる。

アカアシノミゾウムシについては、まだ生態が不明のため詳しいことがわかっていないが、成虫は五月に現われ食害をはじめ。成虫の体長は二〜三ミリ、体色は黒褐色〜黄褐色で、ノミのようにビヨンビヨンとびはね野外ではなかなか捕えにくい。そして肢が赤い色をしていることからアカアシノミゾウムシという名前がつけられたという。

被害は直ちに枯死につながることはないようだが、翌年の芽ぶきが悪くなり、連年被害を受ける枯損する危険性がある。

防除はスミチオン乳剤の散布が効果があると報告されているが、長野県下ではまだ防除するまでにいたっていない。

なお、ケヤキに寄生する害虫として、数年前大町市周辺でニレハムシが発生したが、この被害もアカアシノミゾウムシと同じように葉を葉脈を残して食害する。

#### 五、ハンノキムシ

ハンノキハムシもまた昭和四十七年から県

内各地で異常発生した一ツである。この害虫は、ハンノキ類、カンパ類などを食害する害虫であるが、県下ではヤマハンノキに異常発生した。

被害は幼虫による五〜七月頃の葉の食害と、成虫の現れる八〜十月の葉の食害といったように、ほぼ年間を通じて加害されるので、ヤマハンノキは丸坊主になってしまふ。成虫は体長約六ミリで、体色は光沢のある暗青色である。

この害虫は、昭和四十八年には戸隠高原一帯に大発生があり枯死寸前のハンノキがいたるところに出現し、丁度その時戸隠高原でガールスカウト世界大会が開催されるというところで、皇太子妃殿下が臨席されるにつき、その防除をどうするかで関係者が非常に苦慮したといういわくつきの害虫である。

防除は、スミチオン、ダイアジノンなどの低毒性有機リン剤の散布で充分の効果が得られた。

#### 六、トサカフトメイガ

最近、トサカフトメイガによるクルミの被害がめだつてきた。この害虫はクルミ、ヌルデ類を食害するが、幼虫による食害期は八〜九月で、幼虫は老熟幼虫で体長約三〜五ミリ、頭部黒色で赤色がかった橙色の体色で、群棲して糸を張り葉を食害する。

目下上田地方でクルミに群棲して毎年被害を与えているアメリカシロヒトリと同じような甚だしい被害となる。

この害虫もディブテレックス、スミチオンなどの薬剤で防除できる。

なおこの他にクルミ類の害虫としては、前記のアメリカシロヒトリ、夏期に出現して食害の甚だしいクルミヒラタハムシなどの発生もみられる。

#### 七、その他

以上述べたように県内では昭和四十七年以来、これまで余り発生のみられなかったもの



クルミの葉を食害中のクミヒラタハムシの幼虫

や、珍らしいものが幾種類も異常発生したが、この他にもサクラにはサクラヒラタハバチ、モンクロシヤチホコ(サクラケムシ)、マツ林ではマツカレハ(マツケムシ)、ハラアカマイマイ、トチやイチヨウなどにクスサン(シラガダウ)、ナラ類にウスアミメキハマキなど種々の発生がみられた。

これらの被害については、早期に被害に気付いて早目の防除対策をとれば、少ない被害でおさえることができるのだが、ともすれば被害の発見がおそく、被害面積も拡がりすぎて手遅れとなる場合が多い。

放置して枯れないものでも樹勢が弱まるので、その後に気象害や二次病害、二次性害虫の寄生などの諸害を招き、やがては枯れる心配が大きい。したがって大きくは自然保護という見地になつて、山林所有者の真摯な対策を期待する次第である。

(農林省林業試験場木曽分場)



# 秋と私

秋は私を落ちつけない。

残暑の厳しい日々もいつしか過ぎ、夏山の季節がいつのまにか終わりを告げる。新聞に穂スキの便りが聞かれるとももなく、里からの山なみは、薄く紫がかり、冷える日には何か荘厳な、また、何か泣き出しなくなるような秋山の姿をあらわす。

ひきしまった白馬の大雪渓を登って、翌日は霜枯れたウルップ草を足元に見ながら杓子からへと稜線をたどる。自分のブロッケン現象に驚きながら、富山側の目にしみる紅葉の道を不帰から唐松へとまいて行く。須佐渡から前常念へと霧雨の中を登る。山の小屋で高齢の登山者と山旅の喜びを語る。絵にもならないのにスケッチブックを携えて上高地へはいり、徳沢から横尾へと足をのぼす。さもないければ、私の愛する万葉の大和路を訪ねる。ところが、これらは、実は数年以前の私の姿であつて今の私ではない。

大町に住まわせてもらつてこの数年。アプローチが近いゆえか、以前の何倍か増して北アルプスの一角を歩くことができた。そして、秋色濃い後立山の峰々は相変わらず、限りなく私を誘ってくれる。しかし、今、秋、私を引きつけてやまないのは山の小さな小人たち、小さな恋人たちである。恋人たちの森。

その一つは、小さいながら精いっぱい着飾り、精いっぱい生きて、その短い命を消してゆく小さな恋人たちである。海岸の水族館で海の植物の神秘に驚嘆させられたが、山のキノコの仲間も知れば知るほど、その神秘的な姿に驚かされている。サンゴを思わせるホウキタケの仲間。濃淡とりどりのベニタケの仲間。チャワンタケの仲間、ヒイロガサ、ベニヤマ

## 清沢由之

タケ、ヒイロタケの赤。サンコタケやツチダリ、スッポンタケ、ミミブサタケなどの不思議な形。小から大、ひよわなものからたくましいものまでいろいろなサルノコシカケの仲間。これらは数えたらきりがない。

年によるが、九月も半ば過ぎ、あこがれの松茸が顔をのぞかせる。初の一本が採れると私の松茸追いが始まる。五時半頃山にはいる



1 マツタケ、2 ホンシメジ、3 シャカシメジ、4 スメリイグチ・ハナイグチ  
5、サクラシメジ、7 ホウキタケ

山で明るくなるのを待つ日もある。雨の日も風の日も。とは言え、私が知る松茸山はごくわずか。採った覚えのある地点にして二十箇所余り。そう採れる訳がない。今朝は止めよう。たとえ出ていても他の人の楽しみのためもある。一度はそうも思うのだが、自動車やバイクの音が聞えると、つい足が山へ向つてしまう。早起き野球の青年や、新聞屋さんの車さえキノコ採りに思えてしまう。

私のこの病気は、一カ月半に及ぶ。たかがキノコ、たかが松茸と笑われそうだが。チョット頭をのぞかせたのをみつけた喜び。土を押えた時の確かな感触、手ごたえ。菌輪を作っている所にも出くわしたら(昨年は二十八本一カ所に顔を出していた。一万才である。)

まずは自然への感謝、思わず合掌して次々といただき、小さいのはうめて残す。それを他人に採られた時の無念さは特別だ。シロの上を掘り返してしまつてあるのによつてか、怒りがこみあげる。松茸ほど繊細で気むずかし屋はない。外国ではある基準より小さいのを採ると罰を受けるという。土の中のをさぐり当てるのはよいが、松茸のように外生菌根を作つて生木と共生(寄生)しているキノコは環境破壊が致命的なのだ。松茸が採れなくなる十月末、私は時々夢みる、誰も行かない山のどこかで秘かに頭をもたげて群生している松茸を。松茸の蒸し焼き、酒蒸し、かん酒、これらは格別だが私は欲深なもので雑キノコを多く採る。味はこちらに上等のものが多く、外国人は喜ばないそうだが、ぬらめきのあるイグチの類(リコボウの仲間)ナメコやアブラシメジの仲間。カワタケ、ホウキタケ、ハナビラタケなどもおいしい。凶鑑で確かめながら若干の恐れをもつて口にすることもあった。やはり知ることはいじだということを実感させられている。けとばされ見すごされている中にすばらしいキノコがある。また一方、ナスと食べる、縦にさける、じみのものはよい、等の判別法は当てにならないこと。こわいキノコもあること。

(大町市立第一中学校)

山と博物館 第20巻 第10号  
発行所 長野県大町市TEL(026)21-1111  
印刷所 大町市下仲町 大町山岳博物館  
定価 年額四〇〇円(送料共)(切手不可)  
郵便振替口座番号(長野二、一九三)